

形容詞の分布と意味

水 野 江依子

1. 序論

ミニマリストプログラムの研究において、近年、統語構造は非常に豊かなものとなっている。また統語構造を構成するそれらの機能範疇が、言語要素の統語的振る舞いだけでなく意味解釈に重要な役割を果たしていることも解明されてきた。例えば Rizzi (1997) は CP 構造について、Cinque (1999) は TP 構造について、そして Travis (2010) は VP 構造についてそれぞれ様々な提案を行っている。本論の目的は、形容詞の分布と意味解釈に関する最近の議論を検証することによって、DP 構造の観点から統語構造が意味解釈に対して果たす役割について考察するとともに、DP 構造がほかの統語構造と同様、より豊かな構造を持ちうるか否かの可能性を探ることである。

本論の構成は以下のとおりである。2 節では不定代名詞と形容詞の統語分布に関する Kishimoto (2000) の N 移動分析について考察し 3 節ではその問題点を意味解釈の観点から指摘する。さらに 4 節では統語構造が意味解釈に反映される際に必要とされる様々な条件について論じる。5 節は結語である。

2. 形容詞の分布と N 移動分析

英語の限定形容詞は一般的に名詞の前に現れることができるが後ろに現れることはできない。

- (1) a. a proud man
b. an interesting books
- (2) a. *a man proud
b. *a book interesting

しかしながら、不定代名詞 (e.g. *everything, something, someplace*) と共起する場合、形容詞は不定代名詞の後ろに現れなければならないその逆は容認不可能

となる。

- (3) a. everything interesting
 b. something delicious
 (4) a. *interesting everything
 b. *delicious something

普通名詞と不定代名詞のこのような分布の違いについて Kishimoto (2000)は、不定代名詞の N 移動を仮定することによって説明ができると論じている。具体的にみてみよう。不定代名詞はしばしば限定詞と名詞の二つの独立した主要部から構成されていると論じられているが、それを示す証拠として(5)で示したように副詞が不定代名詞を修飾できることを挙げている。

- (5) almost / virtually / nearly everyone

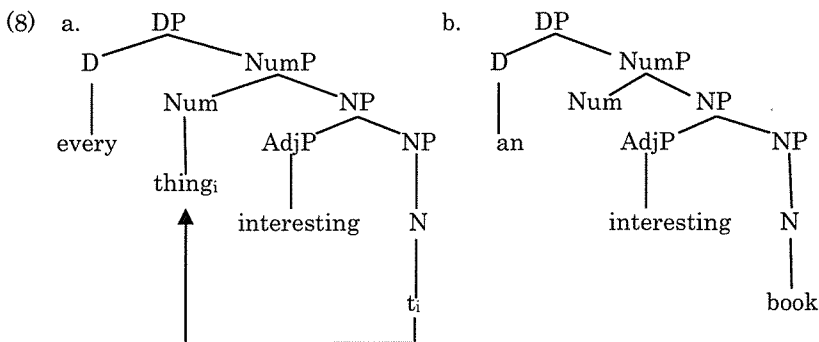
一般的に副詞は(6)で示すように名詞や代名詞を修飾することはできない。

- (6) a. *almost / virtually / nearly people
 b. *almost / virtually / nearly them

これは(5)の不定代名詞 *everyone* が単一の名詞で構成されていないことを示唆しており、*every* が D 主要部、*thing* が NP に独立して基底生成されているとすれば ([_{DP} *every* [_{NP} *thing*]]), (7)の *all* が副詞に修飾される事実と平行的に説明することができるかと論じている。

- (7) almost / virtually / nearly all (the) students

これを前提に(1)(3)の派生を次のように提案している。



不定代名詞を含む DP は(8a)で示したように *thing* が形容詞の右側に生起し N 繰り上げによって NumP の主要部へ移動している。その結果形容詞が不定代名詞に後置することになる。一方、(8b)で示したように普通名詞の *book* は N 主

要部に基底生成され移動はしない。よって形容詞は名詞に前置することになり、(1)・(4)で示した対比が説明される。

ミニマリストプログラムにおいて移動は何らかの駆動要因を必要とする。ここでの N 移動の駆動要因について Kishimoto は範疇 Num がもつ [+singular] 素性が不定代名詞の *thing, place* を牽引すると提案している。さらには Roberts (1998) の顕在的 V 移動の考えをこの N 移動に拡張し、顕在的な N 移動は Num 主要部が弱い [+singular] 素性をもつと仮定することで説明ができるとしている。すなわち、完全な語彙的名詞が顕在的移動をしないのは弱い N 素性がこれらの形式素性のみが移動するため随伴(pied-piping)が行われないからであり、意味的に軽い名詞(light noun)が顕在的に移動するのはそれが形式素性のみから構成されているからであるとしている。

この N 移動分析は節における助動詞 *have, be* の V 繰り上げと並行的なものである点からも概念的に支持されると Kishimoto は論じている。よく知られているように英語の助動詞 *have, be* は顕在的に繰り上がり、否定辞 *not* の左側に現れる。

- (9) a. John has *not* arrived yesterday.
b. *John not has arrived yesterday.

一方、*have* が使役の意味で使われると移動は起こらず、否定辞の右側にとどまったままとなる。

- (10) The parents did *not* have the patient examined by the doctor.

(9)と(10)の違いは、助動詞 *have* が意味的に軽いのに対し、使役の *have* は本動詞と同じで完全な語彙的意味をもっていることにある。すなわち意味が軽ければ移動し、語彙的な意味をもっていれば移動がないと言える。不定代名詞もこの意味の軽重の違いによる移動の有無が観察される。(11a)で示したように不定代名詞と共に起する場合形容詞は右側に現れるが、*thing* などが完全な意味をもつ名詞として使われた場合、形容詞は名詞の左側に現れる。

- (11) a. everything interesting
b. every interesting thing

不定代名詞の一部として現れる *thing, place* は意味内容を持たないため軽く、助動詞の *have* が繰り上がるのと同様、顕在的に移動し、一方(11b)で示したように語彙的な名詞として現れると場合は完全な意味をもつため本動詞の *have* が移動しないのと同様、顕在的に移動しない。従って(11a,b)のような分布の違い

いが生じるとしている。

3. N 移動分析の問題点

Kishimoto (2000)の分析において本稿で着目したい点は、形容詞の基底生成される位置が名詞の種類に関係なく NP に付加された同じ位置であるという主張である。本節では表層的な位置に関係なく形容詞の位置を統一的に扱うという主張には統語的・意味的に問題があると指摘する。

3.1 統語的観点から

N 移動分析のもとでは不定代名詞のみが形容詞に前置でき、移動を伴わない普通名詞は必ず形容詞に後置するという予測をするが実際はそうではない。例えば Larson and Marušič (2004)は *present* のような形容詞、接頭辞 *a-*で始まる形容詞(*abeam, afraid, apart, asleep, awake* 等)は名詞の後ろにのみ生起すると指摘している。

- (12) a. every woman *present*
b. *every *present* woman

- (13) a. the children *asleep*
b. ??the *asleep* children

また *-able/-ible* を接辞としてとる形容詞は名詞の前後に生起することができる。

- (14) a. the *visible* stars
b. the stars *visible*
(15) a. the responsible individuals
b. the individuals responsible

N 移動分析のもとでは普通名詞は N 繰り上げを起こさないため、(12a) (13a) (14b) (15b)の語順を説明することができず問題となる。また形容詞には *live* のように名詞の前にしか生起しないものもある。


- (16) a. some *live* thing
b. *a *thing* live

これは不定代名詞と共起しても同様である。

- (17) *something *live*

N 移動分析が正しければ(18)のような派生が可能であるが、実際はそうでない。

従ってここでも N 移動分析が問題であることがわかる。

- (18) [DP some [NumP thing [NP live [NP ____]]]]
- 


第二に, Larson and Marušič (2004)は, 二つ以上の形容詞は名詞の前に生起することはできるが後ろに生起することはできないことを指摘している。

- (19) a. *the rivers *explored navigable*
b. *the jewels *visible stolen*

これは不定代名詞と共起する場合も同様である。

- (20) a. every large heavy thing
b. *everything large heavy

もし N 移動分析が正しければ, (21)で示したように *thing* の N 移動によって正しく派生されるはずであるが(20b)で示したように実際は容認不可能である。


- (21) [DP every [NumP thing [NP large [NP heavy [NP ____]]]]]]
- 

従って N 移動分析は問題があるといえよう。

さらに単位を表す形容詞と共起する場合, (22a)(23a)で示したように名詞の前に現れると屈折はないが, (22b)(23b)で示したように名詞の後ろに現れる場合は複数形をとる。

- (22) a. a [23-inch-long] rope
b. a rope [23 inches long]
- (23) a. a [2-mile-wide] river
b. a river [2 miles wide]

もし名詞に後置する, 単位を示す形容詞が基底位置でそこから不定代名詞の N 移動が起こった場合, 屈折が現れない名詞句が派生されると予測されるが実際は容認不可能である。

- (24) [DP any [NumP thing [NP 23 inch long [NP ____]]]]
- 

- (25) a. *anything 23 inch long
b. anything 23 inches long

以上のように N 移動分析は様々な統語的観点から問題があるといえる。

3.2 意味解釈の観点から

名詞の前後に現れる形容詞は統語的振舞いの違いだけでなく、解釈が異なるという点にも注目したい。

Bolinger (1967)がすでに指摘しているように、名詞の前後に生起することができる形容詞は現れる位置によって解釈が異なる。例えば *visible*, *navigable*, *responsible*等の形容詞は(26)で示したように名詞に前置する場合、内在的にその特性を限定する(individual-level)解釈と一時的な特性を示す(stage-level)という解釈の二通りが可能であるのに対し、(27)で示したように名詞に後置する場合一時的な特性を示す解釈しかできない。

- (26) a. the *visible* stars
b. the *navigable* rivers
c. the *responsible* individuals
- (27) a. the stars *visible*
b. the rivers *navigable*
c. the individuals *responsible*

具体的には、(26a)はその星はもとの光度があるため裸眼でもみることができるという解釈とたまたまある状況でその星がみることができるという解釈が可能となる。一方、(27a)は後者の解釈しかできない。

また *unsuitable*は、名詞の前に現れる場合は制限的な解釈と非制限的な解釈の二通りが可能であるが、名詞の後ろに現れる場合は制限的な解釈しかできない。

- (28) All of his *unsuitable* acts were condemned. [ambiguous]
(i) 'All his acts were condemned; they were unsuitable.'
(nonrestrictive)
(ii) 'All (and only) his acts that were unsuitable were condemned.'
(restrictive)
- (29) Every word *unsuitable* was deleted. [unambiguous]
(i) # 'Every word was deleted; they were unsuitable.' (nonrestrictive)
(ii) 'Every word that was unsuitable was deleted.' (restrictive)

上記の形容詞を使って不定代名詞について考えてみよう。N移動分析のもとでは、形容詞はもともと名詞の前に生起している。そして *thing* が N 移動し結果として表層的には形容詞が名詞に後置する形となる。

- (31) a. Everything *unsuitable* was deleted.
 b. [_{DP} every [_{NumP} thing [_{NP} unsuitable [_{NP} ____]]]

意味の観点から見ていくと名詞に前置する形容詞は解釈が曖昧であるから、それを基底生成として派生した(30)(31)も解釈が曖昧であると予測されるだろう。しかし実際はそうではない。(30a)(31a)の解釈は曖昧ではなく、それぞれ一時的な解釈と制限的な解釈しか持たない。N 移動分析のもとでは、形容詞の表層的な位置に関係なく基底生成される位置は等しいと主張されているが、形容詞は表層の位置によってその解釈が異なる。この点はどのように説明するのであろうか。問題が残るであろう。

3.3 DP 構造

以上の点から Larson and Marušič (2004)は形容詞の分布の違いは N 移動によって派生されるものではなく、(32)のように二つの基底生成される位置があると主張している。

(32) *DP-/NP-modifier Analysis*
$$[\text{DP } D \quad \alpha \quad [\text{NP } \beta \quad \text{N}] \quad \alpha]$$

そして形容詞は基底生成される位置が異なるため解釈も異なると提案している。具体的には、NP を修飾する β 位置に現れる形容詞は individual level の解釈をし、DP を修飾する α 位置に現れる形容詞は stage-level の解釈をする。例えば、先にみたように名詞に前置される *visible* は individual-level の解釈と stage-level の解釈の二通りの解釈が可能であるが、これは前者が β 位置に生じ後者が α 位置に生じることによって生じると述べている。

- (33) a. [_{DP} the [_{NP} visible stars]]
b. [_{DP} the visible [_{NP} stars]]

二つの位置があるということは(34)で示したように該当の形容詞が名詞の前に二つ共起できるということから支持される。

- (34) a. the visible visible stars
b. [_{DP} the *visible* [_{NP} *visible* stars]]

一方、名詞に後置する形容詞は DP 修飾となるので stage-level の解釈しか持たないと言える。

(35) [DP the [NP stars] *visible*]

不定代名詞に関して形容詞が β 位置に生起する可能性はないのかという指摘があるかもしれない。その場合は事実上反し individual-level の解釈をもってしまう。この指摘については Larson and Marušič (2004) は次のように説明している。不定代名詞の *-thing*, *-body*, *-one*, *-place* は軽名詞であり D の選択要求を満たすために NP 内に基底生成される。しかしながら N と融合しない限り軽名詞が主要部となる名詞句は不完全(defective)であるため容認不可能となり、この位置に生起することはできない。不定代名詞が生起するためには DP 修飾位置(= α 位置)に生起する必要がある。この場合、必ず形容詞は不定代名詞に後置されることになり、 β 位置に現れるという可能性は排除される。

このように分布の違いによる意味解釈の相違をその言語要素が併合される統語位置の違いに起因させた Larson and Marušič (2004) の分析は N 移動分析が抱える統語的・意味的問題を解決するという点で優れているように思われる。また CP や TP, VP などにおいて豊かな統語構造が意味解釈に重要な役割を果たすという近年の研究結果から鑑みたとき、DP 構造においても意味解釈の相違を統語構造に求めるという考え方は正しい方向であるように思われる。但し解決すべき問題点も残されており、次節ではその問題点を指摘した上で今後の方向性を探りたい。

4. 統語と意味の関係性

Larson and Marušič (2004) は形容詞が併合される統語位置によって意味が異なるという提案をしたが、彼らの分析において DP や NP の何がその意味の違いを生じさせるのかにまで言及されていない。従って DP 付加位置に併合される形容詞と NP 付加位置に併合されると形容詞でなぜ意味の違いが生じるのかという基本的な問題が残ってしまう。

さらに同じ α 位置あるいは β 位置に併合される形容詞でも形容詞によって解釈が異なる(cf. (27), (28), (29), Cinque (2010:23))。つまり α 位置に併合される形容詞でも形容詞によって stage-level の解釈であったり restrictive の解釈であったりする。この意味の差はどのように説明されるのだろうか。語彙の持

つ意味の違いだろうか。では stage-level と restrictive といった語彙のそれぞれの解釈に DP 付加位置はどのような役割を果たしているのだろうか。いずれにせよ Larson and Marušič の提案では不十分で統語と意味を結びつけるさらなる提案が必要となる。ここでは可能性として統語と意味を結びつける 3 つの提案を示したい。

第一の可能性は、Diesing (1992) が提案した論理構造との写像関係を用いることであろう。Diesing は主語の定・不定の解釈を論理形式と対応させそれを統語構造の IP 指定辞, VP 指定辞に写像させた。この仮説は意味と統語を直接的に結びつけるものであり形容詞にこのような論理形式を対応させることができれば一つの解決策となるかもしれない。

第二の可能性は Cinque (2010) が提案したように DP 付加位置に生成される形容詞句と NP 付加位置に生成される形容詞句自身の内部構造が異なるものであると考えることである。Cinque は α 位置に現れる形容詞は関係代名詞節から形容詞以外の部分が削除されたものであるとし、 β 位置に現れる形容詞は単独で現れるものであると提案した。

(36) [AP₁ ~~that is~~ visible [AP₂ visible stars [AP₃ ~~that is~~ visible]]]

この提案のもとでは、それぞれの語彙特有の意味が現れる位置によって異なって具現されることは説明が可能であろう。

第三の可能性は、Cinque (1999) の副詞における分析で行った考え方であろう。副詞も形容詞と同様その現れる位置によって解釈が異なる。この解釈の違いに対して Cinque (1999) は副詞が現れる機能範疇の違いに起因させた。例えば *frankly* が Mod_{speech-act} の指定辞位置に生起すれば指定辞・主要部関係のもとその副詞は発話行為副詞としての解釈を得、同じ副詞が V の指定辞に現れれば指定辞・主要部関係で様態副詞の解釈を持つというものである。これを形容詞の分布と意味解釈に拡大するとすれば、(37) で示したように DP 構造はさらに豊かなものとして提示される必要があるであろう。

(37) [AP_{stage-level} [AP_{restrictive} ... N ...

またこの提案のもとでは、語彙によって異なる解釈も DP 構造をより豊かなものにすることで語彙特性に起因させなくても統語的に解釈が可能となる。

5. 結語

本論では統語構造が意味に対して果たす役割について形容詞を事例としてとりあげ先行研究の分析を中心に検証をした。N 移動分析は形容詞の分布について説明することは可能であるが、形容詞の分布によって意味が異なることを説明できないということを指摘した。DP/NP 分析は統語位置の違いを形容詞に与えることによって意味解釈の違いが説明できるという可能性を示唆したが、理論的にまだ不十分であり検討の余地があるということを指摘した。今後は理論的不備をどのように解決したらよいかということをいくつかの可能性を検討しながらさらなるデータをもとに検証していくことが必要であろう。

参考文献

- Bolinger, Dwight. 1967. Adjectives in English: Attribution and prediction. *Lingua* 18: 1-34.
- Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Cinque, Guglielmo. 2010. *The syntax of adjectives: A comparative study*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Diesing, Molly. 1992. *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kishimoto, Hideki. 2000. Indefinite pronouns and overt N-raising. *Linguistic Inquiry* 20: 557-566.
- Larson, Richard K. and Franc Marušič. 2004. On indefinite pronoun structures with APs: Reply to Kishimoto. *Linguistic Inquiry* 35: 268-287.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Liliane haegeman, ed. *Elements of grammar: Handbook in generative syntax*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Roberts, Ian. 1998. *Have / Be raising, Move F, and Procrastinate*. *Linguistic Inquiry* 29: 113-125.
- Travis, Lisa deMena. 2010. *Inner Aspect: The Articulation of VP*. Dordrecht: Springer.